
犬の話

小宮山譲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬の話

【Nコード】

N4459D

【作者名】

小宮山譲

【あらすじ】

学校事務員の40男である「俺」は一児の父で同僚の図書館司書と不倫の関係。痴話喧嘩で妻を殴り、妻は実家に帰る。「俺」にはちょっとした「事情」から、他者と深く関わることを避ける性癖がある。不倫相手にその「事情」を打ち明けることによって仲は精神的にも急速に接近。しかし妻が戻ってくることになり……。

ヒカルを連れて公園に行つて家に戻つてきたのが十二時半。まだ昼飯は出来ていなかった。まあいい。俺は殿様ではない。我慢しなければいけない。

女房は二つのカップラーメンを俺のために用意していた。一つは幸楽ラーメンのしょうゆ味。もう一つはエースコックのスーパーカップ濃厚とんこつ一・五倍。流し台の上に並べて、どちらにする？好きな方を選ばせてあげる、と言う。俺がエースコックを指さすと向こうはすかさず賞味期限が幸楽の方が早い。あと二ヶ月しかない。と返す。二ヶ月もあれば十分だ、と言いながら俺はビニールの封を破つてエースコックに湯を注ぐとすると、待つて、と女房。今煮立っている雪平鍋の湯はヒカルのうどんに使うからと。

「あと、もうちょっとだけ」

わかった。そっちにも段取りというのがある。大人しく台所と続きの居間で、ヒカルを膝に抱いて待つ。丸い合板の折り畳み式の小さな座卓を前にして。ホームセンターで買った星一徹がひっくり返しそうなこの卓袱台は、案外便利だ。女房の嫁入り道具の白木のダイニングテーブルは危ない。ヒカルが椅子伝いによじ登つて、足を滑らせて頭から落ちたことがあった。たんこぶが出来ただけで大事には至らなかったが、それ以来椅子は物置にしまった。椅子なしで立つて食うわけにもいかなないので床に座つて食べるように買つてきたのがこの卓袱台だ。白木の食卓は家計簿やメモや食器などの物置き台になった。

フローリングの床にはゴムのマットが敷いてある。子供というのはよく転ぶ。プーさんとその仲間たちの図柄は赤や黄色がどぎついが、店頭にある中で一番分厚かったのもこれにした。家から持つて行ったメジャーで測ると一・九センチ　大して厚くもないか

あつた。

座つてあたりに手を伸ばして朝刊を捜す。床には何日も前の新聞やスーパ―のチラシがマクドナルドのハッピーセットのがらくたに混じつて散乱している。今日の日付の入った朝刊を見つけて手に取り、壁にもたれて斜め読みする。景気の好転を日銀が下方修正。産廃不法投棄過去最高全国で七四万トン。幼女殺人犯血液型判明「B型」。勤務態度を注意された上司に石焼きビビンバ鍋を投げつけ頭骸骨陥没。そこで腹がくうと鳴る。ヒカルがそれを聞いてくうと口で音を真似る。そういえば今朝は飯を食っていなかった。起きるのが遅かったのと忘れていたのと。そんなことを考えているところに女房が出来上がったラーメンとヒカルのうどんを盆に乘せて運んでくる。蓋を開けると湯が内側の目印の線より二センチほど上まできいている。かき混ぜてスーブを啜ってみる。ちよつとばかり水くさい塩辛いよりはヘルシーだと自分に言い聞かす。ついで麺を嚙る。硬い。アルデンテ。まあいい。これも。ふにやふにやよりは。食つてる間に柔らかくなるだろう。

女房は玄関先で、十二時過ぎには歸つて来て、と俺たちを見送つた。十時過ぎだった。風が冷たいかもしれないと思つて先週より厚着をして出掛けた。ヒカルにはフリースの青いジャケットをトーマスのトレーナーの上に着せ、俺も同じユニクロの土日限定で買った青いフリースのジャケットを厚手のネルのシャツの上に着た。この趣味のよくない赤いチェツクのネルシャツは作業着屋で買ったもつと安物だ。二九〇円。しかし一応コットン百%。独特のオイル臭さみたいなものは何度洗つても取れないが、なんといつても暖かいし、肌着を下に着ればそう痒くなったりもしない。出掛ける直前、ヒカルがまた靴を左右逆に履いていたのに気付き、脱がせて履き替えさせる。

まだ自分では漕げない三輪車に乗ったヒカルの後ろを押して、家から歩いて二分とかからない公園に行く。垣根の椿がそろそろ咲き始めてはいたが、日射しは朝から強く、意外に暖かった。着いた

ときは誰もいず、俺たち親子の貸切だった。ヒカルはすぐさま三輪車を降りて、いつものように両手を風車のように振り回しながら園内を走り回った。意味不明の言葉を大声で喚いて、走り疲れると休憩する間も惜しんで今度はブランコ。自分ではこれも満足に漕げないので俺に補助してくれと促す。落ちないように介添えしながら軽く揺らしてやると、きゃきゃと喜んで顔をくしゃくしゃにする。面白がって揺さぶりを強くすると、すぐにいやいや、こわいこわいと俺の腕にしがみついて泣き出す。かといって揺らすのをやめると文句を垂れる。続いてシーソーに滑り台に砂場。シーソーはいつもすぐに飽きるが、滑り台は階段を昇って滑って、また階段を昇って滑ってを三十回以上繰り返す。つきだしに刺身に煮物に焼き物に天麩羅、という先週の親戚の法事で並んだ膳を思い出す。お定まりというやつだ。これらを順番に、たつぷりと遊ばせて帰った。特に砂場を。本当は鉄棒もあつたが、あれはまだ無理だ。背伸びしてもヒカルの手は届かない。

子守りを二時間以上して家に帰って昼飯はカップラーメン。それも出来ていない。これからつくるところ。何も文句はない。なぜなら、俺はラーメンが大好きだから。特に即席ラーメンが。本当だ。そのことに關しては何の不足もない。湯の分量を間違えようが、麵の茹で加減を誤ろうが。ただ、一つだけ致命的なミスを女房は犯した。調味油を入れ忘れたのだ。これを入れると入れないでコクが天と地の開きになるのをラーメンに疎い彼女 有機と無添加が好物な は知らなかった。これだけは許せない。だがよく考えれば今から入れても間に合う。さらに女房はヒカルのうどん こちらはインスタントではない も同時につくらなければいけない。こんなことで一々腹を立てていてはもたない。自分にまたそう言い聞かせることで俺は平静を装う。気持ちを落ち着かせるために新聞を再度つかんでアサツテ君を読みながら普通の調子で言う。なんか最近のこれ、いや、前からかもしれないけど、特に最近は、食い物のネタ、多くないか。それと、あと、あれ、調味油、忘れてないか。

このラーメン。

「ああ、そう。自分でして」

俺は流し台の隅に置かれた白濁色の小さなビニールの小袋を取りに行く。だから俺がつくつてやると言ったのに。出来ないなら出来ないと素直に最初から言え。自分では小声で呟いたつもりが意外にも大きい声だったのか、女房は急に血相を変えて怒りだした。聞き逃してくれなかった。

「どういうことよ。こっちはヒーちゃんのご飯でてんてこまいなんだから。お父さんもちよつとは協力してよ。そのぐらい。それに何よ。ラーメンもつくれないって。そんな人どこにいるの。一体」

女は二人きりになるなり、俺のベルトに手をかけ、スポンを半分ずり降ろし、後ろにまわり、尻に噛みついた。それもかなりの強い顎の力で。俺は出血していたかもしれない。しかし振り払おうとはしなかった。驚きと恐怖で体が固まってしまったからではない。頭とは裏腹に立っていたからだ。

女は後ろから俺の腹に手を絡ませて噛み続けた。噛みながらその両手は前をまさぐりだした。歯の力は強かったが、手の動きは極めて緩やかで優しかった。触っているのかどうかかわらないほど。さつきほんのわずかに過ぎった女房の顔はすぐに消し飛んだ。何だかよくわからなかったが、深く考えずにされるがままにしようと思った。女は顎の動きに緩急を設けていた。きつく噛んだり緩く噛んだりし、歯形をつける箇所も微妙に移動させていた。もつとこのまま続けてほしいと思い始めたところ、舌も使いだした。噛んで、舐めて、噛んで、舐めて、を繰り返す。俺は無意識に膝を立てて腰を浮かした。舌はカタツムリかナメクジのように尻の下の方へ這いだし、女は首をひねり顔を仰向けにした。上から見下ろすと股の間からのぞいた女と目が合った。女は微笑んだ。天女に見えた。その後すぐに目を閉じてまた、股の下に顔は隠れた。隠れたかと思うとまずその点を唾だらけにして滑らかにした後、次にすぼめられた舌先で勢

いをつけて穿った。俺は不覚にも声をあげてしまった。そんな奥まで入るのかと思えるほど深く刺さった、ように感じた。俺は軽く出した。ベッドのシーツに飛沫が少量飛び散った。女の首は俺の股下でゆっくりと上下運動を繰り返した。また出しそうになったが今度は何とか堪えた。その代わりシーツをつかんで女の名前を　この時点ではまだ苗字で、それも下にさんをつけて　叫んでいた。死ぬまで続くかと思えた数分間が過ぎた後、自分の口から大量の涎が流れているのに気付いた俺は相当な間抜け面をして大口を開けていたに違いない。

それ以来俺は女から離れられなくなってしまった。安い男だ、俺は。少し尻を噛んでもらったぐらいで、少し尻の穴に舌の先を入れてもらったぐらいで、少し足の指を隈なく舐め回してもらったぐらいで、少し金玉を……。あんたこういうことされるの好きでしよう前からわかってた。女は急に馴れ馴れしく下卑た口調でニヤニヤしながら、さて次はどんなことをしてやろうかな、といったずらっ子のように上目遣いで俺を見る。

女は大柄で肩幅が広く口も大きくメガネも大きく化粧がヘタで田舎臭く俺の好みでも誰の好みでもなさそうで全く男好きしなさそうでどうしてそうなったのか皆目見当がつかずそんなゲテモノみたいな雌豚みたいな女だとは思ってもみなかったのだ……。

そんな雌豚とヒカルを引き替えにするのはあまりにも馬鹿げているのはわかっていた。のか、本当に。女房と引き替えにするのは一向にかまわない。慰謝料とやらを取られても。しかしヒカルは別だ。かけがえのない俺の生き甲斐だ。夢だ。希望だ。辛気くさく、屈辱的で、保険の利かない、人様に言えない、あの不妊治療の末にやっと出来た宝物だ。朝早くから家を出して持っていたり、病院でガラス容器に出したり、そのほかにも情けない思いを随分と　女房はもったしたかもしれないが、それは知らない　した。欲しいと思ってから丸八年かかった。いつときの愚劣な慰みと一緒にには出来ない。のか本当に……。

出来ないから出来ないと言ったんだ、などと言い返さなければ何も問題なかった。あのとき、俺はどうかしていた。なぜ？ 腹が減っていたから。冗談にしまえばそれまでのことだったのだから出来なかった。どういう意味よ？ としつこく食い下がる女房も大人気ない。もういいよ、とワザとしらけたフリをする俺。舐めてんの？ そこまで馬鹿にしないでいいでしょう。何よ、ラーメンぐらいで、いい大人が。恥ずかしくないの。

ヒカルは横で手を叩いてきゃっきゃと笑っている。二人のやりとりをテレビのコントか夫婦漫才か何かと同じに思っているのだろうか。うるさい。俺はいま飯を食ってるんだ、静かにしてくれ。ふー、と大袈裟な溜息をついた後でまた俺の口は開いてしまった。

「だから俺がつくつてやると言ったのに」

そう言い終わる前に女房が俺のほつぺたをつねった。「何よ」と言いつつ。ヒカルはますます喜んで一緒になって俺のほつぺたをつねる真似をする。まずい。俺の父親としての威厳 そんなものは初めからないが がこのままだと危うい。だいたいがいつも侮られ続けているように思う。この辺で一度、目にものを見せてやるかと思ったとき、既に俺の右手は動いていた。いい加減にしろ、と言うのと同時の平手打ちだった。女房は目を丸くした。縦の長さが三倍に広がった。猫かこいつは。犬が喋った。猿が字を書いた。絶対にあり得ないことが起きた。そんな驚きようだ。

「やったわね」

こちらを鋭く睨みつけてから駆け足で二階に上がる。俺は何気ない風な顔でラーメンの残りを食った。ようやく麵は程良い歯ごたえになっていたが、何の味もしなかった。女房にまた腹が立ってきた。せつかくの昼食を台無しにしゃがって。俺の大好きな一・五倍を。それまで つい五分かそこら前まで は何もかもうまくいっていたのに。

天気もよかったし、ヒカルの機嫌もよかったし。小春日和という

やつだった。昨日までは雨が続いて鬱陶しかった。ここ一週間ぐら
いは十一月とは思えない寒い日ばかりだったが、今日は違っていた。
ベンチに座った俺は、つい何度もうとうとしてしまった。ヒカルは
砂場で長い間砂をいじっている。近所のどの子供も持っているアン
パンマンのお砂場セットで顔の型をつくるのにも、長雨の後は砂が
湿っていていい案配で埃も立ちにくかった。ヒカルは大人しくお山
か塔をつくっては潰し、潰してはまたつくりしていた。俺はその小
さな後ろ姿をベンチに座って横目で見ながら、うつらうつらし、夢
を見た。女の夢だった。
して。

女はあれで着やせする方なのか乳房はハンドボールのように大
きく、まだそんなに垂れ下がってはいない。乳輪も白人か妊婦のよ
うに大きい。好みの分かれるところだろうが俺は好きだ。

ひっくり返してみる。後ろからがいい。俺はこれが一番好きだ。
上から見るときれいな形の白い大きな瓢箪のようだ。瓢箪を眺めな
がら俺はゆっくりと突く。ぬるぬるとした感触にまた涎が出てくる。
今まではなかったことだ。涎は俺の顎を伝って糸を引きながら瓢箪
の上にぬるりと滴り落ちる。下の方で絶えず甲高い音が鳴っている。
あたる、あたる、奥にあたると歌っているのが、ワタル、ワタル、
と自分の名を呼ばれているように聞こえる。知らぬ間に突きは激し
くなっていく。突きに合わせるかのようにどろん、どろんと途
絶えることのないシタールの音がどこからともなく聞こえてくる。
低いシタールの音と艶っぽく甲高い歌声とが耳の奥に鳴り響く。ど
ろん、あたる、どろん、あたる、どろん、ささる、どろん、
あたる、どろん。おくに、どろん。

目覚めたとき、俺は口を開けていた。顎から落ちた涎はフリース
にべつとりとついている。まるで痴呆老人のようだと思った。前の
あたりにほのかに暖かい感触があった。尿失禁によるものではなく、
何十年かぶりの軽い夢精によるものだった。トランクスを通り抜け
てベージュ色のチノパンもしっかり濡れていた。これはデパートで

買ったブランドものだ。ネルシャツとはゼロが二つ違う。高が知れてはいるが。洗えば染みにならずにきれいに落ちるだろうか。その前に女房は気付いて不審がるだろうか。まあそれほど気にすることもない。公園で遊んでいて汚れた、とでも言えればいい。よその子にソフトクリームをつけられたとかどうか。臍の下の丸いゴルフボール状の広がりをしみじみと眺めながら、情けなくもあるが、何となくまんざらでもない気もした。まだ俺は若い、と。

ずっと貸し切りだった公園に、若い子連れの母親がやってきたので俺は慌てて足を組んだ。彼女は目が合うと俺ににこりと会釈をした。さくらちゃん、お友達よ、仲良く遊びましようね、と手を引いた子に話しかける。ヒカルは一瞥しただけで後は無視している。彼は面食いなのだ。俺と同じだ。さくらちゃんは悪いがちよつとブスだ。どこがどうというのではないがなんとなく醜い。第一、顔がでかすぎる。ヒカルとはえらい違いだ。この小顔は密かな自慢だ。ヒカルはあつちを向いて一人でお山か塔か、またそんなものをつくっている。しかしさくらちゃんは傷つかない。ミッキーのお砂場セツトを袋から出して機嫌よく遊び始めている。彼女は彼女でヒカルなど眼中にない。

さくらちゃんは赤いプラスチックのスコップで穴を掘っている。ひたすら掘っている。奥へ奥へ、下へ下へと深く長いトンネルを憑かれたように。ぼつかりと口を開けた黒い穴が見える。洞窟なのか、ボーリング調査なのか、犬のように宝物を隠す場所なのか。ヒカルは我関せず、そのすぐ側で土塊を積み上げている。どうやらヒカルが拵えているのは山でなく塔のようだ。麓を盛らずに上へ上へと湿った砂を重ねていく。やがてヒカルの肩ぐらいまで聳える太くて立派なものが出来上がる。二つを見比べて高校のとき途中まで読んだ精神分析入門だったか夢なんとかだったかを思い出した。待てよ。これは逆じゃないのか。お互いのつくるものが。とかなんとか。

さくらちゃんはいつのまにか玩具の如雨露で水を汲んで来ていた。自分のつくった穴の奥まで如雨露の口を入れて水をちよろちよると

流し込む。空になると再び水道栓のある所へ行き、アヒルのような危うい足取りで重い如雨露を両手で抱えて戻ってくる。何度か繰り返すうちに貫通していないトンネルの水は満杯となり、入り口から泥水が逆流して外へ溢れ出る。しかしそれも一時で、じきに砂に吸い取られて元に戻る。

相変わらず子供らはずっと背中合わせのままだ。母親の意に反して仲良く一緒に遊ばない。さくらちゃんの母親は前屈みになりながらも、決して脚を屈めてしゃがみこんだりしない。彼女は公園に来る母親にしては珍しい、スカートにパンプスという出で立ちだ。フリースにジーンズにスニーカー、髪は少し栗毛に染めて短かい目でほとんどノーメイクに近い、というのがここらに来る母親の定番。しかし彼女は黒の胸元の開いたセーターに黒のタイト気味の後ろからだとひかがみが丸見えになるスカートを穿き、よく見ると尻や肩に比べてなぜかウエストと足首だけがおそろしく細い。頭は長いまま引つ詰めにもしていないので風のたびに靡いて顔が半分髪で隠れる。ひよっとして水商売の人なんだろう。高くて俺なんかにはとても行けそうにないような店で働いているんだろう。化粧も完璧で、まだ若く、しかも驚くほどの美人だ。さくらちゃんは運悪く父親似か。顔はまずくても稼ぎの方はさぞいいんだろう。さくらちゃんのお父さんは。躓きかけたさくらちゃんを抱きかかえようと母親はにじり寄る。ほんの一瞬しゃがんだ隙にスカートの中から見えたのは、白ではなく黒の下着だった。俺はまた少し立ってくる。さっきの夢が続いている。

今から十時間ちょっと前、俺たちは連れ込みにいた。もう飽きたか、と俺は訊いた。ぜんぜん、と女は答える。二回終わっていた。女は風呂場で鼻歌を歌っていた。松田聖子だった。どう聞いてもヘタだった。飽きたの？ とちょっと間を置いてから女は問い返す。しかし言い方は自信たっぷりだ。俺も、ぜんぜん、と天井の染みでも数えながら答える。

俺たちはうまくいつている。何の問題もない。女は俺よりも一歳上だが、何の差し障りもなかった。三十七も八も、今更同じようなものだった。女は俺の同僚だ。同じ高校で働いている。俺は学校事務で女は司書だ。つい数ヶ月前まではこんなところでこんなことをすることになるとは夢にも思わなかった。女のことはずっと前から知っていた。三年前にこの学校に転勤してきたときから。しかし俺は全く何とも思わなかった。あのとき、二人きりにならなかったら、こんなことにはならなかっただろう。

俺たちは教育委員会の人権研修で、田舎町の同じビジネスホテルに泊まることになった。もちろん部屋は別だ。夏のことだった。もともと百五十%俺にそんな気はなかった。女性職員と泊まりがけの出張や研修はこれまでも何度かあった。当然何も起こらなかった。むしろそれが普通だ。特にこの女は司書になるために生まれ、本にも生き、本に埋もれ、本とともに死んでゆく、醜い尼さんだ、と勝手に思いこんでいた。容貌、服装、振る舞い、佇まい、どれをとっても俺から見れば性別などほとんど意味をなさない枯れきった水墨画であり、空気より軽く存在感のないヘリウムだった。

だから打ち合わせと称して俺の部屋に入ってきたときも、別段何とも思わなかった。俺はベッドに腰掛けて新聞を読んでいた。化粧気はいつもどおりほとんどなく、少々俯き加減で表情がなかったのもいつもどおり。ただチャコールグレーのスーツのスカートの丈は心持ち短く、腰の線が強調されているように感じなくもなかった。後で思えば。

学校名の入った襦付きの茶封筒を携え、ドアを開け、ずり落ちかけたメガネの真ん中を人差し指でくいと上げて入るなり中から鍵をかけたところから女の態度は豹変した。ベッドの俺に走り寄り、新聞を取り上げ、無言でベルトに手をかけてズボンをずり下ろしてから素速く後ろに回り込んだ。突然のことで俺は驚くしかなかった。いや、違う。嘘だ。止めようとすれば出来た。所詮女の力だ。手品のように手際がよかったわけでもない。本当は。結構どたばたとし

た動きだった。自分が今何をされているのか、これからどうなるのか考える時間の余裕は十分あった。振り払うことはいくらでも出来た。その気になりさえすれば。しかし俺はその気にならなかった。

「あんなこと、誰にでもするのか？」

「まさか。初めてよ」

いくらなんでも初めてのはずはなかったが、俺が二人目なのか二十人目なのか、二百人目なのかは皆目わからなかった。歳を考えれば二十人目でも決しておかしくはなかった。こいつなら淡々と黙々と、案外それ以上の数でもこなしていそうだ。そうだ。この女はろくでもない食わせ者だった。ドキンちゃんと同じ牛乳瓶底メガネをかけて登場し、五分後には修道女よりは貞淑だが、ソープ嬢よりは遙かにふしだらという、あのポルノビデオの図書館司書そのものだった。

女は最中、首を絞めてくれたりした。映画とかでは見たことがあったが実生活では新機軸だった。本当に死ぬかと思った。頭の芯が痛くなった。

噛んだりしたのは最初だけだった。歯形や爪痕やキスマークなど、差し支えのありそうなものは控えてくれた。

出した直後にタオルで両手を縛って乳首を舐め回してくれたときには、あまりのくすぐったさに身悶えして思わず大きな声をあげてしまった。

「素敵だ……」

俺は思わずそう言った。後からすぐに恥ずかしくなった。照れ隠しに「よかった」と言い直した。ものすごくよかった、とも。これからまた逢ってくれないか。いや是非とも。俺が嫌じゃなかったら。とかなんとか。明らかに媚びていた。女は返事をせずただ笑っていた。右に八重歯があるのに初めて気付いた。

女房は階下へ降りて来るなり、俺に顔を近づけた。見てよ。これ。唇のまわりが赤かった。口を自分の指で広げて唇の裏側を見せ

た。嘘だろ。俺は言ったが、嘘なわけないでしょう。女房は怒りながら泣いた。たしかに切れて血が出ている。それも少量とは言えない量の。腐って破れた鱈子のようにでこちらまで気分が悪くなった。軽くはたいたつもりだった。この前の渡る世間で、いつものようにわがままを言う聖子に業を煮やした夫の岡本信人がついに正義の平手打ちを食わす。聖子は泣き崩れてしおらしくなる。そういう場面があった。俺もそれと同じシナリオだった。しかし現実とは違っていた。向こうは血は出なかったがこっちは出た。こうなると何十年も殴り合いの喧嘩などしていない俺に分はなかった。それほどまでに強くぶったつもりはない、と何の言い訳にもならないことを口走った。人に手をかけたりしたのは何年ぶりのことだろう。子供のとき以来だ。手加減も思い切りもない。力の配分など何もわからないまま手を動かしたただけだ。ついで真つ暗な記憶が蘇るが、それは無意識のうちに真つ暗なままに勝手に消え去る。

また、女房は二階に上がり、ほどなくして降りてきた。忙しい女だ。右手にワイヤレス電話の子機を握りしめている。

「今、お母さんに電話したの。そしたら、ワタルさん出してっ、て話があるからっ、て。つながってるから出てよ。ほら」

俺の目の前の卓袱台にぽんとそれを置く。いきおいラーメンの汁が飛んで卓袱台に黄色い液がかかった。ヒカルはそれまで口をへの字に曲げて我慢し続けていたが、あまりに陰悪な雰囲気不堪えきれなくなったのか、とうとう泣き出した。俺は無言だった。興奮していたので、何を喋っていいかわからなかったし、何を喋るかかわったものではなかった。ヒカルはさらに大声で泣き喚いた。全部向こうに筒抜けだ。最悪のお膳立てになったと思った。後でこちらからする、俺は小声で女房にそれだけ伝えて受話器を渡す。女房はその子機を握りしめてまた二階に駆け上がった。しらけかえった俺はヒカルをあやししながら伸びたラーメンの残りを食った。ヒカルはじきに泣きやんだが、うどんに箸をつけようとはしなかった。黙って俺の膝から離れて一人で積木遊びを始めた。しばらくしてまた女房

が降りてきた。俺はヒカルに伸びたうどんをまた食わせた。今度は嘘のようにぱくぱくと食べ、汁まで飲みほした。

「全部終わった」

俺は言った。

「全部って何がよ」

「昼飯だよ」

翌朝、全国の無駄なハコモノ、ワーストスリーの一つとして、週刊誌のカラーグラビアに見開きで紹介されたこともある研修会場に、俺たちは時間よりだいぶ早く着いた。ホテルからバスでも行けるらしいが、タクシーに乗った。ちよつとでも早く行って、いい席を確保したかった。

会場となる建物は、まわりには何もない県道沿いの川縁に建つ。

遠目には奇怪で巨大な多角形の黒いオブジェのように見え、近づくに連れて趣味の変わった風俗店カラオケハウスに見えてくる。運転手は指を指して「おかしいでしょう。子供でも笑いますよ」と苦笑した。世界的に著名な建築家の稀代の失敗作として陰で語り継がれる、誰が見てもその田舎町にはおよそ似つかわしくない会場のメインホールに、まだ人の入りはまばらだった。結局、最後になつても六割程度の入りにしかなかったのは俺たちには好都合だった。後に汚職で捕まり留置場で縊死した前の前の町長が、「政治生命を賭してつくった」建物のふかふかの赤絨毯は、十五年あまりの歲月を経て、いささかくだびれてきていた。それでも懐かしいバブルの香は、大理石の廊下や、大きな不整形のガラス窓や、やたらと高い天井や、檜でしつらえた会場の椅子や、そこかしこからぶんぶんと漂ってくる。

俺たちは研修の最初のメニューである講演が始まる三十分以上前に行つて、一番後ろの列の端の席取りをした。女は壁際で俺はその隣。俺の隣には二人の荷物を置いた。冬場であればコートや何かでシート二人分を占領することも不自然ではなかったが、大した荷物

はなく、荷物置き場はシート一人分で足りてしまった。

正面舞台のカーテンには極彩色の大きな鳳凰が描かれていた。これも名前を訊けばそのへんの子供でも知っている有名な漫画家の手によるものだが、名前を聞かなければそのへんの子供の殴り書きに見える。鳳凰の片目はなぜかしら潰れており、口からはやけに長く太く黄色い炎だか痰だかが吐き出されている。

講演が始まるちょっと前から、女は俺のズボンの上に手を置いてきた。二人とも昨夜はほとんど寝ていない。寝ずにあればっかりしていたが、俺はまあ、平気だった。来るなら来い、望むところだ、と。年甲斐もなく奇妙な気負いと興奮があつた。却つて寝ていないせいかもしれない。女はもっと平気だった。そしてもっとタフだった。俺は女の手の上にブリーフケースを重ねて傍から見えないように隠した。

俺の隣席は五つ空いていた。五つ離れた席の隣人をちらとだけ見やった。彼は気付いていない様子だった。本を読んでいた。初老の柔和そうな男だった。ロイドメガネをかけていた。俺は一瞥しただけで、後はずっと前を見ていた。下を見たりもしなかった。俺は用心していた。当たり前だ。誰でもそうする。女は最初はズボンの上からやりわりさするだけだった。はじめ、指は全体をさすつていたが、次第に先端に集中し始める。ごく軽い、鳥の羽が先つぽを這うような感触。がまん汁がトランクスを経てズボンの外まで染みる。蛇の生殺しは四十分以上続いた。

演台ではいつのまにか、サーモンピンクのスーツを着た俺たちぐらしい歳の女が、何やらくっちゃべっている。こういう所で話をする人間にしては、なんとなく蓮つ葉な雰囲気的女だ。眉間に皺を寄せて物憂げな今にも泣き出しそうな目つきは、誰かに似ていると思うが誰だか思い出せない。

腹、立つでしょう。むかつくのよね。安すぎるんですよ。日本はなんでも。特に人権感覚が低すぎて。セクハラ裁判なんか、向こうなら、息の根の止まるくらい会社からぶんどってやれるんだけど。

こっちはしょぼいのよね。裁判所も。まだまだ石頭のおじさんばかりで。おっと、閑話休題。本題に入りますよ。これから。

夫や恋人による暴力は昔からありましたよ。たしかに。でも、問題にされることはあまりなかったの。これが。みんな泣き寝入りしてたのよね。こんなものだと言めて。それとか、ぶたれる自分が悪いんだと。そんな風に考えて、暴力を正当化したりして。そうしないと、そんな相手を選んでしまった自分を否定することにもつながっちゃいますからね。だからおいそれとは他人に話せなかった。でも、決して許されるものではないんです。いいですか。よく聞いてください。暴力というのは、どんな些細なものであっても放置してはいけない。なぜなら、それは際限なく広がる可能性を秘めているから。人間が他の動物と決定的に違う点は何でしょうか？ そう。理性です。理性があるということなんです。人間は理性の生き物なんです。まず、話し合わなければなりません。その次も、その次も、その次も、そして最後も話し合わなければなりません。他に手だてなんかないの。一切。人間である以上は、結局理性で解決するほかないんですよ。暴力というのは、最後の手段ではなく、用いてはならない最低の手段。ええ、言葉の暴力だって同じ。暴力は暴力。力まかせはいけません。何だって。

女は俺のファスナーに手をかける。中に五匹のナメクジが入ってくる。そいつらは熱くうつすらと汗ばんでいる。汗ばんだ指と掌に俺の汗と液とが混じりあう。女の手が体の割に意外に小さいことに気付く。ブリーフケースの下で軟体動物が自在に忙しく這い回る。小指の爪が袋を軽く引っ掻く。誤って引っ掻いたんじゃない。わざとだ。俺は嬉しくて思わず声を出しそうになるが、自分の爪を膝にたてて我慢する。それからほどなく女の手の中ではじける。女は掌で上手に包み込み、こぼさないようにファスナーからそつと取り出す。その後押し頂くように顔を近づけ、壁の方を向いて音をほんのかすかにたてて囁く。最後までハンカチは出さず、舌を使って、ついたのを取るため自分の指の端まで隈なく舐め回す。誰も見ていな

い。おそらく俺以外は。隣のロイドメガネはまだ俯いて本を読んでいる。そんな面白い本なのか。講演は全く聞いていないのか。だとすればけしからん奴だ。俺は一応全部聞いていた。

年齢は関係ないのよね。十代でもするし、八十代でもします。学歴や職業も関係ありません。外見でもわからない。こんな人が、と思うような人が、信じられないひどいことをパートナーに向かってやるから厄介なんです。これが。医者でも、弁護士でも、一流企業に勤める人でも関係ありません。職場や近所で温厚な紳士と呼ばれている彼らが、突然女性に牙を向けるのはセクシュアル・ハラスメントの場合と全く同じです。そしてそれは習慣になります。彼らはすぐ謝ります。都合よく土下座でも何でもします。帰って来てくれ、僕が悪かった、もう二度とあんなことはしない。やり直そう。このとおりだ。そんな風にうまいことを言って、出ていったパートナーを連れ戻すためなら何だってします。そうして連れ戻した後、また同じことを幾度となく繰り返すんです。彼らは征服したいんですね。所有者であり続けたいと。とんでもないことです。困ったことに社会的地位の高い人ほどそう考えるようです。本当に困ったことです。しかし当然女性はモノじゃありません。所有されるいわれは全くない。根底に古くさく誤った考えがあり、それを加害者側が誤っているとはまるで認識していない以上、残念なことですが、抜本的な解決は正直困難です。しかし時間がどれだけかかっても、わたしたちの力で誤った人々の意識を根気よく変えていく必要があります。みなさんもそんな目に遭われたら泣き寝入りせずに、必ず専門の機関に相談してくださいね。積み重ねが大事です。ご静聴、どうもありがとうございます。

「口、拭いてやろうか」

優しく言ったつもりだった。俺は血を見て最初狼狽えたがようやく落ち着いた。女房には今は優しくすべきだと思った。たとえば夫婦喧嘩のたびに自分の母親に電話して逐一言いつけるような女であっ

ても、今回は俺の負けだ。しかし女房は拭わなかった。俺にも拭わせなかった。俺は居間でティッシュの箱を持ったまま立ち往生した。おろおろと。ヒカルはその姿を見て笑った。きゃははは。口元の血は変色してどす黒くなってきた。玄関のチャイムが鳴った。誰だ。こんな時分に。俺は仕方なくインターホンに出た。

「わたし」

母の声だった。さっきの電話の義母ではない。俺の母。先にドアを開けたのは女房の方だった。母は俺の家から五分の距離のところに父と二人で住んでいる。いや、俺たち夫婦は実家に援助してもらった代わりに、両親の家のすぐ近くの建て売りを買ったという方が正しい。両親は二人とも未だに元気で、商店街で電気屋を営んでいる。昔は日曜の朝にはセスナを飛ばして広告したりしていたが、今では量販店に押され、馴染みの年寄り客相手に細々と修理を中心に暇な時間を潰しているに過ぎない。しかしそれももう時間の問題だ。

「聞いたわよ。ミカさんのお母さんから。電話が今さっきあつて。」

「夫婦喧嘩でワタルさんがミカに手をかけて、ミカの唇が切れて出血してヒーちゃんが泣き泣きして大変だから行ってあげてください」で。どうしたってゆうのよ。本当に。突然そんなことおっしやるもんだから、びっくりして慌てて飛び出してきたんじゃないの」

ヒョウ柄のセーターにスパッツ、サンダル履きの母は、玄関で立ったまままぐし立てた。扉は締めてあるが近所に聞こえないように声をつとめて押し殺して。女房が喋る前に俺は言い訳にもならない変なことをもごもごと口走った。つかつかとなつてとか、軽く撫でただけとか、腹が減ってたからとか、先につねってきたのは女房の方だとか、ヒカルの教育上よくないので見せしめのつもりでとか、グーではなくパーでやったとか、傷つけるつもりなんか絶対になかったとか。母は呆れもせず、もつともらしく、ふん、ふん、と一々大きく頷いた。

「そう、先にミカさんがつねったのね」

勝ち誇ったように晴れやかな顔で最後に笑った。

女房は「そうです。わたしが悪かったんです。お騒がせしてすみません。お義母さん」と姑向けの、その場限りの、通り一遍の、思ってもいない、齒が根本から腐りそうな、見え透いた詫びを入れた。終始目は伏せたままだった。母は結局家に上がらなかった。と言うより、俺たちは上げれとも言わなかった。玄関でそんな立ち話をし
て、

「それじゃ、わたしもお父さんもご飯の途中だから。くれぐれも仲良くね。こんなことで一々呼び出されたらたまらないわ」

とかなんとか言って、いつものようにヒカルの相手をする
こともなくそそくさと帰っていった。

玄関先で母の後ろ姿が完全に消えるのを見届けてから、女房は大きな溜息を聞こえよがしについた。涙を目に一杯ためて俺をしばらく無言で睨みつけてから、また二階へ上がった。今度は後について俺も上がった。間抜けな男だと自分で思いながら。女房は寢室のベッドに俯せに倒れ込み、声をあげて泣き出した。俺が近づくとあっちへ行つて、と外に聞こえるくらいの大声を出した。それでも近寄ってわざとらしく髪の毛を撫でたりしたが「触らないで」と放った肘打ちは鳩尾に見事にはまり、俺は咽せかえって涙が出てきた。

実は昼からの講演のときも俺たちは大人しくしていなかった。いや、少なくとも俺の方はするつもりだったが、出来なかった。

今度は壇上では陰気くさい痩せた年齢不詳の女が、ぼそぼそと下を見ながら小声で喋っていた。

最近、子供の発達の「遅れ」だけでなく、「歪み」や「偏り」にも目を向けていこうという動きがあります。アスペルガー症候群やADHDと呼ばれる注意欠陥性多動性障害などの広い意味での「発達障害」のある人は全人口の三から五パーセントに及ぶといわれています。クラスに一人はいる計算です。たいていの場合IQは正常値で、普通学級に在籍しています。病的な意味での他覚症状や自覚症状ありません。しかしたとえばADHDを例にとると、まず多

動癢があります。授業中平気で立つて歩いたりします。高学年になっても治まりません。ひどい子になると、ちよつと目を離れた隙に運動場に出て走り回っていたりします。授業中にです。そして衝動的傾向。彼らは先を読めず瞬間、瞬間を生きています。ガラスに突然手を突っ込んだり、三階の窓から飛び降りたり、灯油を飲んだり。そんなことをすればどうなるか、ほんの少し考えればわかることなのに彼らにはその「ほんの少し」が考えられません。気がついたら骨折していたり、入院していたり。往々にこの子らは注意力が極端に散漫だったりもします。じつとできない。人の話が聞けない。しきりに手を動かす。貧乏揺すりが止められない。結局親からみれば育てにくい子、学校では扱いにくい子ということになり、虐待やいじめの格好の対象になります。また非行や犯罪に走るケースも少なくありません。先天的なもので、前頭葉に損傷があるともいわれていますが、明らかではありません。MRIでもわかりません。脳波も正常な場合がほとんどです。しかし日常生活をスムーズに行えないという点では、間違いなく障害があると言えます。ですから早めに察知し、何らかのサポートをしていく必要性が出てくるわけです。全体の割合では男児が女児より圧倒的に多くて以前は……。

俺がまじめに聞いている最中、脇腹をつついて女が耳元で囁いた。「あたしにもして」

今度は俺に手を動かさなければならぬ順番が廻ってきた。顔だけ前を向きながら右手で女のスカートのジッパーに手をかけた。今度は女が自分のハンドバッグを腿の上に乗せた。たまたま俺がジッパーのある左側に座っていたのがよかったと最初は思った。もしかして女はこれも計算の上で俺の右に座ったのだろうか。しかしどっちでもいいことだった。なぜならこれはよくなかった。明らかに失敗だった。俺がさつき女が俺にしたことと同じようなことをし始めると、女はすぐに声を立てた。最初は小さな声だった。それでも俺は大いに慌てた。おい、待て、やめろ、やばいよ。冗談じゃないよ。小声で言って手を止めると、なんでやめろの、もっと続けてよ、と

いう恨みがましい目で俺を見つめる。通常では考えられないことだが、俺は仕方なく気圧されて言われるままに続けてしまった。すると今度はすぐに、あっ、という呻き声を唐突にあげる。周囲が一斉に振り返る。ロイドメガネもこのときばかりは読みかけの本を伏せてこちらを向く。俺は顔から火が出そうになる。慌てて動作を止めた後、どうしていいかわからない。しかし、口が勝手に動いてくれた。

「なんでもありません、ちょっと気分が悪くなったようなんです。大丈夫ですから」

と咄嗟に出鱈目を言って二人で会場を出た。もちろんジッパーは人に気付かれないようにどさくさに手早く締めて。前では陰気な女が、抑揚のない声で淡々と下を向いて話しているのが扉を開けて振り返った際に見えた。彼女が何を話していたかまで聞き取れるような余裕はとてもなかった。

俺たちは無人のロビーに出ると、お互いが顔を見合わせて笑った。あははは。わけもなく馬鹿笑いをした。気付かれたかな。大丈夫よ。女はぺろりと舌を出した。随分長い舌だった。そんな仕草をする女だとは、職場にいるときは想像もつかなかった。

「ともかく、外へ出ましょう。ここは空気、悪いから」

女の変な意見に俺は頷いた。外へ出たが何もなかった。店も家もビルも小屋も納屋さえも。建物らしきものは、県道を挟んで少し離れたところに町役場と消防署が見えるぐらいだった。行き交う車の数も点滅信号さえ要らないほど少なく、ほとんどが砂利や建設廃材を積んだダンプカーだった。道端は車が去った後もしばらくは砂埃がきつく、そんな所で突っ立っていてもしょうがない俺たちは自然と河原に下りた。

芦がまばらに生える初夏の川縁は意外に涼しかった。まだ梅雨が明けずはつきりしない鼠色の空の下、湿ってところどころぬかるんだ砂利道を、いつのまにか俺たちは手を繋いで歩いていた。誰もいないので知らぬ間に大胆になっていた。俺たちは無言で歩いていた。

何も言わなくても行く先は決まっていた。向こうにある茂みには芦が多く生い茂っていた。完全に姿が隠れるには至らないかもしれないが、それはそれで一興だ。ダンプの運転手が脇見をして事故でも起こしてくれたら、何て素晴らしいんだろう。数分後を想像して、俺の胸は高鳴った。傍から見れば気のふれた薄気味悪い中年かもしれないが、俺たちは結構楽しんでた。

昨日のチェックインから丸一日も経っていなかった。

俺は仕方なしに二階のパソコンのある物置部屋で仕事をすることにした。女房の桐のタンス、ヒカルのベビータンス、木製のスヌーピーのカタカタ、布製のミフィーのマット、スーツを買ったときはるやまでもらった萎んだ三つの赤い風船。乳児用の体重計、ズボンプレッサー、ミシン、ビニール袋を被った扇風機、マグナムドライ三五〇缶二ケース、家電製品の空箱、玩具の空箱……。そんな物に埋もれて隅の方に机と椅子と古い富士通のFMVがある。よく固まるので買い換えたいと思い始めてから二年は経つ。体育館の建て替え工事の数字の検算をする。職場で何度やっても数が合わないのを持って帰った。エクセルの単純な演算だ。普通にやれば豚でも合うはずのものがなぜか合わない。

女房は俺を寝室に入れようとしな。しばらく一人にしてくれと言つてドアを閉めたままだ。鍵はかからないので入っていけるが、そこまではしない。その前に、階下にいるヒカルをいつまでも一人で放っておくわけにいかないのに気付く。もうとつくにテレビの上に登ったり、台所の奥にしまった包丁を取り出して振り回したり、天麩羅油の入った缶を床にひっくり返しているかもしれない。そう思つて急いで階下に降りると、居間のヒーターの前で気持ちよさそうに口を開けて寝ていた。押入から毛布を出してかけてやり、また物置に戻り一人で仕事を片づける。女房が気になつて手につかない、ということはない。捗る。なぜか却つて頭が冴えて数字が合いたした。普段なら三人で買い物やらなんやらで、どこかへ出掛けな

くてはいけない時間だが、今日は仕事ができる。休みの日に家で仕事ができるなどと喜ぶのは馬鹿な話かもしれないが、女房はその点とても不寛容だ。仕事は外でして。家に持ち込まないで。わたしを愛してないの。と新婚当初に手の遅い俺がお持ち帰り残業をするのを咎めた。以来、学校で残ってしこしこ片づけることはあっても、家では一切やらない。ところが「放課後」は今や毎日のように連れ込みに行かなければならなくなったので、仕事には充てられない。仕方なく無駄を承知で何の気なしに持って帰った書類が役に立った。刹那の自己満足を味わっていると女房が部屋に入ってきた。ノックはしない。

「また、おかあさんから電話があつたの」

「どっちの？」

「わたしの」

「何て？」

「そちらのお母さんから電話をもらった、で。さっき家に行っていたいたという報告の電話。すると何ておっしゃったと思う。お義母さん。見てきたけど特にどうということない。他愛ない痴話喧嘩だから心配ない。ですって。ワタルもそんなに強くぶつたんじやないし、ユリさんがぶたれるときに口をきつく閉じてそれで勝手にご自分で口の中を切つたんじやないか。だって」

味方をしてくれた母には悪いが、感謝は出来ない。そんな嘘をついて何になる。ますます俺の立場が悪くなるだけだ。

「ひどい」

女房は泣いた。その後きつ、と俺を見据えた。もう血はなかった。拭われていた。

「ちゃんとお義母さんに言つといて。わたしが自分で切つたんじやないって」

女房は激しくドアを閉めて出ていった。

「これは仮の話だが」

と俺は断った。

もし、本気で好きだとか絶対放さないとか言ったら、どうする？
え？

俺は後ろから両方の乳房を握りしめて耳元に囁いた。

好きだ。どうしようもない。どうしたらいいんだ。おかしくなりそうだ。片時も頭から離れないんだ。何もいらぬ。俺と心中してくれないか。

え？

本当なんだ。お前にちょんぎられて殺されたいんだ。お前も首を絞めて楽にさせてやるからさ。

俺は目を見開いた。

つまり、なんだ、あれだ。女房も棄てる。子供も棄てる。頼むから俺と一緒に死んでくれないか。

一気に喋ると後は女の出方を待った。女はほんの数秒だけ考えた後、全く動じることなく、俺の目をしっかりと見据え、顎を上向きにして軽くほくそ笑んだ。そして俺の背中を平手でぱちんと叩き、冗談はよし子さん、と百年前の駄洒落を言った。

こいつなら大丈夫。俺は確信した。

間違っても女房と別れて一緒になつてくれとは言い出さないだろう女。俺は幸福だった。誰も俺たちのことには気付くまい。第一、地味すぎる。二人とも目立たないことこの上ない。そしてあまりにもざら。学校事務と司書の不倫の件数というのは、世間で一体どのくらいあるのだろうか。掃いて捨ててもまだ湧いてくるのではないか。教師と生徒でも今時さほど珍しくもないが、俺たちなんかはおさら他人に知られたところで、「それが？」でおしまいの話
ただし女房は別　だ。

ざまあみろ。意味もなくそんな独り言を呟いて、俺はベッドの枕元から流れる有線の軽いジャズを聴きながら一人ほくそ笑んでいる。
「生徒とかともするのか？　たまには」

「まさか」

「それだけ好きだと大変だな」

女は何も言わずに笑っている。今まではどうだったんだよ。適当よ。お前の適当はさぞ凄そうだな。

俺たちの会話は夫婦のそれよりもっと夫婦みたいかもしれない。いや、違っただろうか。よくわからない。俺は女房とこんな話をし合ったことは一度もない。すべきかどうかもわからない。

もう一回いい？ 風呂場から女の鼻に詰まった声がする。折れるまでやるさ。そう言いながら俺の足はそそくさとバスタブに向かっている。

「お持ち帰り」の仕事を片づけて、ようやく正気に戻った俺は義母に電話して平謝りに謝った。それこそ受話器に最敬礼した。差別的な言質による舌禍事件を起こして不登校になった生徒の保護者に電話で詫びる教員の姿を思い出した。しかし俺の詫び方の方が腰がもつと曲がっている。彼の場合、頬を伝う汗の量と吃音の回数は夥しかったが、腰はさほど折れてはいなかった。

まったく、男として、人として、夫として、親として、論外であり、あつてはならないことであり……。

俺は延々と意味のないことを速射砲のようにまくし立てて言い繕った。許してはくれないだろう。どんなひどい罵声を浴びせられるか。そう思っていた。しかし、意外だった。義母は最後に一言だけ言った。

「どうか、仲良くしてやってくださいね」

怒ってもいなかった。ごく普通の言いぶりだった。実はこうなるような気もしていた。保母さんに悪戯を許してもらった園児のように、俺はほっとして受話器を下ろした。

俺の親は二人ともこの結婚には不賛成だった。反対というほどでもないが、賛成もなかった。

「ピアノの先生なんてお高いだけの世間知らずでどうしようもない」妻の父親が音大の教授というのも気に入らなかった。

「やめといた方がいい。難しくて気位ばかりで金はない。いざというとき頼れん。ある意味で最低かもしれんぞ」

最低は言い過ぎだ。それならうちはどうなる、とか思いながらも、

「お前は見栄坊だからあんな子がいいのはわかる。しかし俺には理解できん。もつとなんというか。生涯の伴侶なんだから。面や学歴や肩書きや若さや、そんな上っ面だけ舐め回さず、中味というか人柄というか……」

そんな親父の言葉を今頃になってなるほどと噛みしめたりしている俺は、やはりどうしようもないアホウドリだ。上っ面だけでなく中味をもつと吟味して、選ぶべきだったよ。例えばあの女みたい……。しかし親父が中味の詰まった立派な人物であるかどうかはまた別の話だ。女房がああ夜ヒカルを連れて里に帰った後、俺に電話をかけてきた。

「手をかけたお前が絶対悪い。裁判にでもなったら圧倒的に不利じゃないか。ヒカルも相手も証人だ。嘘を言ってもばれる。家屋敷やら財産やら慰謝料やらごっそりやられる。それより何よりヒカルを取られてしまう。どうするつもりだ。馬鹿なことを……」

俺の貯金に親父の貯金を付け足して買った家を取られるわけがないし、第一これが「屋敷」か、と俺は笑いかけたが、親父は俺たちが今すぐにでも離婚するのを前提に喋っているということに気付いて笑えなくなった。このとき親父はいつものように女房の名を呼ばず、単に「相手」と呼び続けた。義父や義母やその弁護士も含まれるという意味だろうが、親父なりの女房への憤りと憎しみが歪んだ物言いに表れていた。

「手に職があるのも却って徒だ。あっちで子供相手に教えれば何も不自由しない」

「あの子、自分で切ったんだよ。きつと。なぜって？ お前がひっぱいたときは何ともなかったんだろ。その後二階に駆け上がった、降りてきたら口のまわりが赤かったって言うじゃないか。いか

にもあの子のやりそうなことだよ。ひよつとしたら血じゃなくなんか塗ってたのもしれないよ。お前には触らせなかったんだろ。自分でいつのまにか拭き取ってたことだってさ。何から何まで怪しいよ。お前は騙されてるんだよ。だいたい、あの子はお前にすぐに口答えするだろう。わたしは自慢にはならないけど、この歳になるまで、お父さんに口答えしたことなんか、いつペンもないよ。舐められてるんだよ。お前は。たしかにあの子はどこかお前を馬鹿にしてるよ。心の底に「来てやった」てところがあるよ。きっと。お腹の中じゃ何考えてんだか。だから、あんなわがままそうなお嬢はイヤだって言っただのに……。お前、ちゃんと自分の名義で貯金しとかないと、本当にやられちゃうよ。ボーナスとかも自分で管理してるのかい……」

途中で電話を代わった母が泣きそうな声を絞り出した。

俺たちはスキー場で知り合った。よくある話だ。俺はスキーだけは人並み以上にうまかった。体育はいつも4だったが、スキーだけなら間違いないくらいが貰えただろう。女房はボーゲンしか出来なかった。俺にはそれが可愛く見えた。ゲレンデでは何でも俺の言うとおりにした。それが直ちに、従順で何でも言うことを聞きそうな風に見えた、とまでは言わない。そんなことはわからない。たったの二日か三日、雪の上で昼間は滑って遊んで、夜はロッジで甘いカクテルを呑みながらきれいごとを並べ合っただけで、お互いのことなど千分の一もわかるはずない。

女房は最後の夜、初めて自分はピアノを教えているとか話したが、俺は適当に相づちを打ったもののその実、何の関心もなかった。自分は絶対音感があるとか、全国的なコンクールで入賞したことがあるとかいった自慢話をただ黙って笑いながら聞いていた。それほど腕前ならどうして近所の子供に教えたりせずにプロにならないかなどといったセリフは思っても口にはしなかった。

俺の音楽の成績はずっと2だった。音痴、というやつかもしれない。多分そうだろう。だからカラオケも大嫌いだし、誘われても絶

対歌わない。しかし俺は我慢して話を聞き続けた。ほんのわずかのモスコミュールで真っ赤に染まった女房の夢中で話す口元が、無性に愛らしく思えたからだ。艶のある濡れた小さな赤い唇から唾が飛び散っても、ひとつも不快ではなかった。

格好良く見えた。でも、それだけだった。それだけの人だった。でも、あのときはそれが一番大事だった。それだけでもいいと思った。でも、やつぱりちがっていた。人間は中味だ。見抜けなかった。騙された。いや、ちがう。最初からわかっていて。本当はわかっていた。軽い人だというのも、冷たい人だというのも、口先だけの人だというのも。全部わかっていて。なのになぜか選んでしまった。どちらにしてもわたしは馬鹿だった。

女房ともっと前に喧嘩したとき、そんなことを口走ったことがあったのを思い出した。

「ほつぺたをちよつと撫でられたぐらいで母親に電話して実家に帰っちゃうような女、棄てちゃいなよ」

事情を話せば女はこんな風に言うだろうか。女は女房のことを「女」と呼ぶだろうか、それとも「奥さん」と呼ぶだろうか。女房の話題はお互いがこれまで一言も口にすることがないので、何と呼ぶのかさえ想像もつかない。

駅から歩けば二十分以上はかかる古びたマンションの駐車場に、俺たちは別々の車から降りた。車の形の四角い虎ロップを地面に打ち付けただけで、水たまりもあれば雑草も生い茂る原っぱ。大した管理もされていなければ空きも一杯あるので、どこにでも停められる。

学校が終わると、時間を少しずらして俺たちは帰った。先に出た女はコンビニの駐車場で時間調整のために待っていたが、俺が来たのをバックミラーで認めるとウインカーを右に出した。いつもはここで左に出す。今日はいつもとは違い、連れ込みには行かない。ここからは方向が逆だ。

日はとつくに暮れていた。再開発が一向に進まない街のまわりには古い工場の煙突ぐらいいしか高い建物はなかった。その黒く細長い物陰だけが満月に映えている。白のワゴンRに施錠している女に俺は後ろから小声で尋ねた。声というか音は大丈夫なのか、と。心配ない。建物は古いがあれでも防音装置が施してある。ちょっとやそつとでは漏れないはず。実は前にハイツにいたときは壁が薄くて、隣の部屋の男がコップを逆立てて聞いていてつきまとわれたりして困ったことがあったと女は言った。いつの話だと訊くと、はぐらかした。さあ、十年ぐらいい前のことのような気がする、と。自慢めいたいかかわしい話だと思った。作り話かもしれないそんな話に、しかし俺は興奮した。相手の男や隣の男、それに十年ほど前の若かった女がめまぐるしく頭の中で勝手に動き回った。

相手の男は肉体労働者か水商売。おそらく板前。それがいい。頭は五分刈りで汗かきで体臭は割とある方だが毛深くはない。煙草はよく吸う。上背はあまりないが、がっしりしている。眉が太く指がごつい。どこで知り合ったかもわからないが、居酒屋ぐらいいにしておく。カウンターで声をかけたのは女の方。チューハイでほんのり顔を赤らめた女が思わせぶりな態度に出たので、これはいけると思った男は特にタイプではないが、ただならまあいいかと誘いに乗る男の方もふけ顔だがまだ二十代。二人とも大して酔っぱらわないまま、すぐに話はまとまる。その晩、比較的早い時間から連れ込みに行く。男が付近に路上駐車したガンメタのクラウンで。結構よかったですで男の方が入れ込む。それからは女の部屋に男は飽きもせず通い詰めることになる。同棲はしない。いや、ひよつとしたら一時期していたかもしれないが、それはどちらでもかまわない。隣室の男はやはりメガネをかけている。かなり度の強い近視で腺病質な二十二歳。専門学校を中退して現在はフリーター。それも短期のアルバイトばかり。体が弱いので常勤は無理だ、と周囲にはこぼしているが、もちろんどこも悪くない。以前鬱病で医者に通ったことがあるのを密かに自慢している。自分は実は芸術家気質なのだ。警察の

世話になったことはないが、職質と称さずよく警官が部屋を尋ねて来るのには気を悪くしている。彼らはおしなべて低姿勢だが、そのへんが却って気持ち悪い。いつかでかいことをやって、あいつらも含めて世間をぎゃふんと言わせてやろうと思っているが、差し当たってめぼしい目標はなく、最近はおっぱい夜が来るのを楽しみにしている。普通にしていってもあの声なら木造二階建て安普請のこのなんとかハイツでは隣に丸聞こえだが、コップを使うととってもよく聞こえるというので、試してみたらそのとおりだったことに気をよくしている。テープに録音して後から楽しんでいるが、やはり生が好きだ。女は無意識か、あるいは隣を意識してか、ときどき素っ頓狂な声やわざとらしい大袈裟な言葉を吐くのでしらけることもあるが、概ね彼は満足している。女のことは調べつくしてある。年齢、職業、血液型、スリーサイズ、好きな食べ物、家族構成、性的嗜好、その他諸々。電柱のゴミ袋をあされば一発だ。色んなことが手にとるようにわかる。女は不用心でずばらな性格なのか、下着を切り刻まずに棄てる癖がある。この前体液の付着した下着が丸々出てきたときなどは、あまりの嬉しさに声を出しそうになった。部屋の鍵が新聞受けの裏側にまるでいつでも忍び込んでください、と言わんばかりに置いてあるのも最近見つけた。それ以降、女の出払っているときを見越して、しょっちゅう部屋に忍び込むようになる。鍵を開けるとまず、部屋の匂いを思い切り嗅ぐために倒れそうになるまできつく息を吸い込む。やりすぎて本当に気を失いかけたこともある。饅頭えた動物的な雌の匂いが嗅げると嬉しい。たとえば汗や尿。だからトイレの汚物入れの点検は欠かさない。それからクローゼットの衣類を嗅いだり舐め回したり穿いたりしてまたきれいに畳んで元に戻しては帰ったりしていたが、じきに物足りなくなり、妄想は膨らみ、自分で抑えきれなくなり、女がよく出入りするスーパーやコンビニの前をうろろろするようになる。はじめのうちは五分刈りや警察を恐れてこそこそ地味にやっていたのだが、徐々に大胆に後をつけ回したりするようになり……。

部屋に入るなり玄関の鍵もかけずに俺はズボンをずりさげた。いつものことなので女は慌てなかった。それが連れ込みか自分の家かの違いだけだった。女はいつのまにか俺の頭の中で男好きのする天下の色女になっていた。

俺の妄想も勝手なものだ。

女の実家はうどん屋で、このすぐ近くだという。三つ違いの兄が最近やっと結婚して家業を継いで親と同居することになったので、自分はまた家を出ていかなければならなくなった。過去一人で暮らしたのはなんとかハイツの一年半ほどだけだった。家業のことも、兄弟がいることも、兄嫁は女より十歳下であることも、俺はこのとき初めて知った。今時あんなださいうどん屋をよく継ぐ気になった。来る嫁も来る嫁だ。若いみそらで頭がいかれているのではないか。我が家であるということからか、女の口は滑らかになっていた。俺たちは身の上話や過去の話は滅多にしない。必要があるとき、その都度お互いが小出しにする。都合の悪いことは話さないし訊かない。辻褄が少々合わないと思っけていても一々詮索しない。こんな仲になつてから三月以上経っているが、女の部屋に来たのは今日が初めて。女房が昨日、里へ帰ったことは女には話していない。話していないが、偶然一人暮らしを始めた女の方から誘つて来た。天恵、という大袈裟だが、まあそんなものかとも思う。

昨日のあの件以来、俺の心と体はもうほとんど女に傾いてきている。冷静に考えても、あんなことぐらいで里に帰るような奴ではこれから先が思いやられるし、今回もすんなりと帰つてくる保証はない。また帰ってくる代わりに、妙な条件のようなものを突きつけられたりするのとはまったものではない。しかしあの女房ならそれもありかな、とも思える。ヒカルは残念ながら一人っ子になるだろう。今の女房では弟や妹は産めそうにない。俺が植え付けられない。すまないヒカル。パパはもうこっちのおばちゃんの方がいいんだ。ママには飽いただんよ。でも、ヒカル、お前だけは放さないからね。

俺は随分と虫のいいことを言う甘ちゃんだろうか。あるいは支離

滅裂だろうか。女とヒカル、その二つさえあれば　それ自体が矛盾するが　後は何もいらぬ。一生女房に法外な慰謝料を払い続けることになってもかまわぬ。木造三階建てで二十坪もないあんなウサギ小屋など、いつ叩き売っても　ただし三階の粗大ゴミと成っているグラントピアノは女房に引き取ってほしい。でないと地震が来れば底が抜けてしまう　いい。そして女房と別れてヒカルを女と二人で育てる。夢のようだ。だがその前に女房は死んでもヒカルを離さないだろう。

小六のときの担任はイボンヌ・エリマンを意識していた。

当時大学を出て三年目か四年目。ストレートの長髪に、細めのジーンズを穿き、夏場は体より小さめの絞り染めのＴシャツを着ていた。そんな格好をするものだから、痩せている割にグラマーな胸元はいつも揺れてはちきれそうで、子供とはいえ六年にもなると目のやり場に困った。切れ長の目と口元が「ジーザス・クライスト・スーパースター」でキリストの恋人役を演じた件の日系米人女優に似ているというのは、本人が言い出したことで誰もそんな「外人」のことなど知らなかった。授業中もその映画を見るようにとさかんに勧めてはいたが俺は未だもって見ていない。実家はアルミサッシの代理店を父親が経営して羽振りによく、大久保清と同じマツダのコスモスポーツで通勤していた。父兄らは「若いのにしっかりしている先生」と言い、子供らは「おもしろい先生」と言った。

ホームルームの時間は、自分は一言も口を利かず、運営の一切を子供らに委ねた。同和教育や性教育などの教科書を使わない授業もマメに行った。学級文庫には自分の家から持ってきた「カムイ伝」や「アポロの詩」などが並んでいた。自信家といえば自信家。気障といえば気障。我が儘といえば我が儘。しかし甲斐性持ちといえば甲斐性持ち。

俺の特有の癖も見過ごさなかった。それまでの単なる「落ち着きのない騒がしい子供」以上の扱いを俺は受けた。一学期の途中から

卒業するまでずっと、俺だけは月ごとに行われる席替えの対象外となり、常時教室の一番前の真ん中の席に座らされ、彼女の監視下で授業を聞いた。それでも一時間以上じっとしていられないところや、黙って人の話を聞かずにすぐに茶々を入れてしまうところなどは結局改まらなかった。

俺が特別扱いだったのは何もそればかりではない。彼女は俺だけいつもなぜかしら呼び捨てにした。他の生徒のように苗字の後に君を付けて呼んでくれなかった。

「ワタルは将来詐欺師になる」

とよく皆の前でからかった。調子がよくて嘘がうまいから、と。あながち冗談ともとれなかったし、親しみを込めて言ってくれているとも思えなかった。

夏休みに入る直前の林間学校へ行くバスの席は隣だった。修学旅行のときもそうだった。彼女は俺のお目付役のようなものだ俺自身は思っていたし、クラスの連中も多分そう思っていた。だからいつも一緒にいるのは不自然ではなかった。鼻唄だとか、先生を独り占めしているなどと言って妬む奴もいなかった、と思う。バスは国道沿いの連れ込み街に通りがかった。昼間なのでネオンはないがけばけしい装飾は今も昔も変わらない。

「あれ、何か知ってる？」

モーターホテルとカタカナで書かれた看板をそのまま読み上げ、車で泊まるどころだろう、と俺は答えた。

「どんな人が？」

「どんな人って、そりゃあ、長距離トラックの運転手の人とか、車で旅行してる人とか、じゃないの？」

思ったとおりのことを素直に俺は口にした。彼女は笑い出した。

「あれはね、男の人と女の人が車に乗って来てね、……するところなのよ」

また、彼女は体罰も行った。まだその当時は、若干そういう教師もいるにはいた。これはどういうわけか対象が男子に限られた。

忘れ物やつまらない悪戯をしたとき、黒板の前に後ろ向きに立たされてプラスチック製の五十センチの定規でズボンの上から尻を三発叩かれた。三発というのは不文律でそう決まっていた。体育会系の彼女は中途半端に撫でるようなヤワなことはせず、ちゃんと力を込めて、後で少々腫れるぐらいの強さで叩いた。皆はこれを結構恐れたが、中には顔を紅潮させて密かに喜ぶ奴も既にいた。俺だ。

イギリスの小学校で体罰を廃止することになった一番の理由は、若い美人教師に鞭で叩かれて欲情する男子児童が続出したからだというのを新聞のコラムで読んだことがある。それは大人になってからのことで、俺はあのとときそんなに異常でもなかったのだと改めて自分に言い聞かせたりした。

俺のクラスで「続出」するほど俺と似たようなのがいたかどうかは知らない。まさか「どうだった？」とほかの奴らに訊けるはずもない。また彼女が「若い美人教師」かどうかは異論のあるところだろう。それでも俺は黒板の前に呼ばれるたびに夢心地だった。そしてそれを気付かれないよう、辛そうな演技をするのは大した苦労ではなかった。わざとつまらない冗談を言って授業を中断させたり、幼稚な悪さを　授業中突然立ち上がって尻を振って踊りだしたりした。

その日の悪さがどんくだらないうものだったかは思い出せない。何せ四半世紀前のことだ。だがそれから後は昨日のことのように覚えてる。

俺はいつものように黒板の前に向かった。渋々、嫌々を装ってふてくされた風にのそのそと。ポケットに両手をつ込んで、正露丸を一瓶まるごと噛み潰したような顔をして。もしあのととき、劇団の子役のオーディションでも受けていれば多分受かっただろう。

気をつけを強要した後、彼女は手加減せず、まず一発放った。俺はいつものように唇を噛んだ。続いて二発目。また下唇を、今度は少し大袈裟に噛んでみた。そして三発目。喜びを殺して目をきつと開いてみせた。歌舞伎の見栄のようでわざとらしくったかなと反省

した。これで終わりだ。そう思った瞬間、さらに一発、オマケが来た。気を許した俺は　ほんの一瞬　喜悅の表情をしてしまった。してしまつたが、またすぐに元の暗く悲しみに満ちた体罰児童の顔を拵えた。おそらく誰も気付かなかつた。彼女のほかは。それを見逃さなかつた彼女はかすかに笑つた。その笑いが微笑みか蔑みか判然としない。わずかコンマ一秒。二人の間で合意は成立した。俺は「ずるい。約束違反だ。四発は」とまた演技しながら引き上げた。掃除当番で遅くなつた俺と教室で二人きりになったとき、やはりこの人も中から鍵を閉めた。偶然を装い、その実、用意周到だつたのも誰かと同じだ。

突然、いつもと違つた猫撫で声で窓際にいた俺に近寄つてきたとき、そこが三階だつたことを俺は思いだした。しかし、あのときの女のように走り寄ることはなく、ゆつくりと摺り足で近づいてきた。隅で突つ立っている俺に息がかかるくらいまで側に寄つてから、自慢の八重歯を見せて微笑んだ。それからまた自慢の白魚のような細長い指を伸ばして俺の喉をさすつた。うつすらと汗ばんだ人差し指の腹で膨らみかけた喉仏を何度も何度もなぞつた。長い爪には薄く塗られたマニキュアが光っていた。静かな教室に二人の唾を飲み込む音が交互に響いた。それまで嗅いだことのない、むせ返るような酸っぱい香水の匂いがした。彼女にとつてもその日は特別の日だつたのかもしれない。それと汗と、消しゴムのカスと、給食のミンチカツに入っていたタマネギの匂いが混じりあつて、目と鼻がつんと痛くなつた。二学期が始まつたばかりで、九月とはいえ真夏と大差なかつた。西日がまともに俺たちに当たり、濃い影をつくりだしていた。影踏み。彼女は俺の影を踏んで動けなくした。本当に金縛りにあつたように身動きがとれなくなつていた。

俺の背は学生時代にバスケットの選手だつた彼女の肩ぐらいまでしかなかった。脂汗が粒になつて溢れ出る。似合わない卑屈な愛想笑いでもしてその場を取り繕おうと試みても、強ばつて出来ない。いざ、こういう場面に立たされると怖かつた。好奇心よりも得体の

知れない恐怖心が勝った。先生、俺に詐欺師は無理だよ。俺は根性なしだよ。彼女は笑いながら振り上げた右手を勢いよく俺の頬に振り下ろす。顔に重く熱い焼き鏝を喰らった俺は弾け飛んで掃除箱の前まで転がった。床はきれいに掃かれていて思いの外よく滑った。彼女はそんな俺を微笑みながら優しく手を添えて立ち上がらせてくれた。そしてもう一度同じことをした。今度は左手を俺の右の頬に振り下ろした。手の残像が残るか残らないかの早業だったのはさつきと同じだ。俺はかわすことも手で防ぐことも出来ないまま、さつきと同じように床の上を横になって滑った。唇は切れていなかったが、鼻血は少し出ていた。このときの彼女の「体罰」は教育的見地に基づく。ただし表面上は。いつもの児童向けのそれではなく、完全に彼女の嗜好に基づいた大人向けのそれだった。容赦はなかった。彼女はようやくそこで部屋のカーテンを閉めた。忘れていたのではない。俺が声もあげられないほど恐れて抵抗できなくなるのを確かめてからそうしたまでだ。横になった俺を再び抱き起こして今度は俺の半ズボンのボタンに手をかけた。その前にハンカチをポケットから取り出して口元に持ってきてくれた。血を拭ってくれるのかと思っただ、そうではなかった。俺の口に絞ったハンカチを宛い首の後ろで結んだ。つまりは猿ぐつわだ。

それから後は覚えているが、思い出したくはない。

「ワタル、あんたって、もともと相当落ち着きない方じゃん。ハンパじゃくさ。それって、多動児、ていうんだよ。」

それに、この前の知能テストの結果、あれも結構ヤバイよ。ワタルの知能指数、微妙な線なんだよね。健常児としては。だからヘタすればクラス替えかも。中学だって普通のところへ行けないかもしれないよ。

でも大丈夫。あたしがそんなことさせないから。絶対に」

全部済んだ後で、彼女は俺を抱きかかえて髪の毛を撫でながらそんなことを言った。ついさっきまでの獣のような呻き声から、鍵を閉めて近づいてきたときと同じ猫撫で声に戻っていた。二人とも床

を転げ回ったので埃だらけだった。教室を出る際に「それと」と付け加えたのは、今のクラスに残りたいなら、普通の中学校へ進みたいなら、今日のことは決して誰にも話してはいけない、という大方予想したとおりの意味の言葉だった。

俺の初体験は公称二十一だが、実際は十一だ。それから後も俺はしばらく彼女の玩具になった。生傷を親に気付かれないようにするために、それ以後風呂には一人で入るようになった。それまでは両親のどちらかが入っていた。もう陰毛が生えかけていたので普通の子供よりは遅い方だと思う。隠しきれない顔の微妙な傷跡は母には「転んだ」と例の絶対ばれる嘘をついた。誰かにいじめられているなら正直に話してごらん、と言われたときは、思わず込み上げてきたが泣くことすら出来なかった。

わかるか？ この情けなさ？

でも、おかげさまでと言うべきか、おあいにくさまと言うべきか、奇跡的と言うべきか、高校までは出られたよ。こんな俺でも、で、大して立派とは言えないかもしれないけど、こうして勤め人にもなれた。どうにかこうにかやってきたよ。今日まで。

そんな話をする女はしばらく俯いて黙り込んだ。

「やけにリアルね。……でも、それ、笑えない」

とだいぶ経ってから慣れない深刻な口調で呟いた。

当たり前だ。笑わそうとしてこんな話をしたんじゃない。あれだ。つい、口が滑ったんだ。墓場まで持つていくつもりだった。この話は。それがあれだ。お前が相手だと気を許しちまうのか、つい喋っちまうんだ。なんだって。それに、今日がはじめてだろう。お前が俺を家に呼んでくれたのは……。

俺は何も怖くない。あれより穢らわしい、忌まわしい、あれより下のことなんてこの世にない。俺はあれからまだ一度もあんな目にもあれに近い目にも遭っていない。

「ひとつ、聞いていい？」

ああ？

「その先生、どうなった？ そのあと、捕まった？」

「今、校長してるよ。同じ小学校戻ってきて」

許せない。女房とかならそう言うところだろうか。しかしこの女の口からそんな言葉は出ない。言葉の代わりにその口で俺の口を塞いで舌を絡め取る。いつもこればかりだ。俺としてもそんなに嫌でもないが。むしろ感謝している。なぜならこんな嘘の話に長々と付き合ってもらったんだから。

掃除当番で遅くなったとき教室の中から鍵を閉めたのも、俺の頬をしこたまはたいたのも、それからカーテンを閉めたのも、最後に埃だらけになったのも、クラス替えがどうの健常児がどうのと脅しをかけたのも全部本当のことだ。ただ、違っていたのはそれをしたのは男の先生だった、ということだ。それも定年に近い、おそろしく口の臭いオヤジだった。俺があのととき教室で嗅がされ続けた匂いは、むせ返るような酸っぱい香水の匂いなどではなく、肥溜めより臭い腐臭だった。

イボンヌ・エリマンは、俺の五年のときの担任だ。彼女が今校長をしてるのも事実だ。俺はイボンヌは好きだった。あのととき彼女にそんなことをしてもらっていれば俺のその後は全く違ったものになっていたろう。六年の担任のその変態爺は、すぐ後によそでも似たようなことをやらかしたのがばれて臆になった。むしろ過去何十年も表沙汰にならなかったことの方が奇跡といていい。余罪を追求する警察やら教頭やらにクラス全員が呼ばれた。何を訊かれても俺は口を閉ざした。だってそうだろう。あんなことを平気でしかず大人たちなど誰一人信用できるわけがない。正直に話したりすればどこで話が漏れて後でどんないじめに遭うかわかったものではない……。

しかし俺もよく、ぐれたり籠もったりせず、ここまで騙し騙しやってこられたもんだ。自分で自分をホメてやりたいぜ。まったく。だからなるだけ日射しの緩い、風いだ余生を送りたいと思っただけ、それはあながち贅沢とも言えないだろう？ どうだよ？ え

え？

それとヒカルだ。あいつは俺の生き甲斐だ。この世の汚いものは一切見せたくないし、嫌な思いや穢らわしい思いだつて一切させたくない。俺の二の舞だけはどんなことがあつても御免だ。もしそんなことする奴がいたら、八つ裂きにしても飽きたらない。

最後のくだりは一部適当に誤魔化して創作した。俺が話をし終えたとき、女の寝室の時計の針は二時を廻っていた。二回終わった後だったが、ますます目は冴えていた。女は何も喋らず、俺の頭を撫でた。

「まあ、忘れてくれ。つまらん話さ。こっちは死んでも忘れられないけど」

「泊まってくでしよう？」

「いや、帰る。関係を長続きさせるためには変わったことはしない方がいい。なるべく何でも今までどおりの方が」

俺は反射的に即答した。もし突然女房が戻ってきたら、という思いが頭をもたげ、そんな奇妙なセリフを俺に吐かせた。臆病なのは百も承知だ。そして卑怯なもの。何とでもほざけ。俺はその程度の男だ。所詮。万が一女房が戻って来たとしても、俺が家に居さえすればこれ以上拗れはしない。どんなに遅く帰っても、とりあえず家で寝た方がましだ。もちろんその日、女房は戻ってなど来なかったが。

女はパジャマ姿で、やはりちよつと不服そうに玄関先まで俺を見送った。駐車場まではついて来なかった。

たまたま早く帰宅した日、郵便受けを開けると、見知らぬ名前の者から俺宛の親展の手紙が届いていた。宛名は印刷ではなく手書きだった。そこには、過去の性体験の話は全部作り話であること、俺が初めての男であること、俺が好きであること、何か俺の役に立てるようなことがあるなら力添えしたいこと、あつかましいかもしれないが出来るなら女房と別れて俺と一緒になつてほしいこと、その

際子供は引き取ってもよいこと、などが回りくどく恥ずかしい表現を使って小さい字でびっしりと書かれていた。封筒の裏に書かれた差出人は男名前だったが、その筆跡は明らかに女文字で、便箋の末尾には、大変な口下手で思ってもいないことばかり口にしてしまうどうしようもない馬鹿な女云々、と認めてあった。

俺は一読すると即座にライターを捜した。水屋、電話台、流し台の引き出し、テレビ台、冷蔵庫の上。しかし煙草をやめてから随分と経つので百円ライターもマッチも見つからなかった。オール電化の家はこんなとき不便極まりないと憤慨しているとき、表で車のエンジン音が聞こえた。女房がヒカルを連れて買い物から帰ってきた。手紙は慌てて丸めてズボンのポケットに入れた。ポケットが膨らんで不自然なので強く押して潰して平たくした。受け取ったのが偶然俺だからよかったものの、えらいことをしてくれる本当にどうしようもない馬鹿な女だ。メールで済むじゃないか。メールで。

そうだ。俺は女房とよりを戻した。

いとも簡単に女房は戻ってきた。俺は里の親の元に行き、土下座をして涙を流して詫びることもせず済んだ。あれだけ怒って家を飛び出しながら、出て三日目の夜、俺が女のマンションから帰ると、普段どおり飯を拵えて待っていた。理由は「明日はヒカルの幼稚園の入園説明会がある」というものだった。本当に丸三日、家を空けただけだった。女房は「やけに今日は遅いわね」と一言こぼしただけでそれ以上は何も言わなかった。やっぱり泊まらなくてよかった、と俺は安堵した。

車から降りてきた女房と入れ替わりに俺はちよつと散歩してくると言っ外へ出て、歩きながら女に携帯をかけた。

あの変な手紙はなんだ。ふざけるのもいい加減にしろ。お前は人の家庭をぶち壊すのか。あんなの冗談に決まってるだろう。いい歳こいて、馬鹿か。恥を知れ。恥を。お前は言っただろう？ 自分で。冗談はよしこさん。ええ？ どうなんだよ？ 何だよ？ 聞こえねえよ。ちゃんと人の話、聞いてんのかよ……。

そこまでは言わなかったが、受話器が繋がると俺の口はそれと似たようなことをくっちゃべっていた。

手紙、受け取った。意味はわかった。でも、ちょっと考えさせてくれないか。やっぱり、前から言ってるように。厳しい。え？　そう。難しいということ。だから難しいんだよ。結論からいくと。こういうことはある程度きちんとしておかないとまずいだろ。え？　聞いてんの？

俺の問いかけには何一つ答えずに女は黙って受話器を置いた。多少の胸騒ぎがしたが、その沈黙に千金の重みがあることまで俺は気付かなかった。女のその後の対応は素速かった。

次の日、女は朝一番で校長室へ行き、何やらひとしきり喚き散らした後、事務室に入ってきた。俺はエクセルの計算に気を取られて全く気付かなかった。背後に人の気配をかすかに感じると同時に、椅子の背もたれが何かに引つ張られて床屋のひげ剃り時のように大きく後ろに回転した。床屋と違って椅子は地べたに届くまでに止まらず、俺は後頭部をしたたかに打った。目の前にはさっきまでのパソコンのディスプレイに代わって、天井に吊された蛍光灯が飛び込んできた。次に蛍光灯の代わりに俺の目の前に順番に現れたのは、白く長く太い脚、その上の赤いレザーの超ミニ、その奥の黒い下着、その上の赤いルージュをべったりと塗った般若のような女の顔だった。女は倒れている俺を跨いでしばらく見下ろしてから股を広げて尻を俺の腹の上に乗せて胸ぐらをつかんで俺を抱き起こし平手打ちを往復三発見舞った。右手の掌で俺の左頬を、甲で右の頬を、それぞれ三回ずつ時計の振り子のように正確に打った。手の甲で殴られた右の頬は女の指輪にはまっていたでかい石榴石のお陰でざっくりと切れた。

「そういえば、こいつは一月生まれだった」　咄嗟にそんなどうでもいいことが脳裏をかすめた。口の中も少し切れた。それだけ終えると女は立ち上がり、また俺をしばらく見下ろし、顔に唾を吐きかけ　　まともに目に入った　　、最後に真っ赤なハイヒールの細い

踵で俺の喉元を踏みつけて 数十秒間息が出来なかった 無言のまま背中を向けて部屋を出ていった。まわりに職員は大勢いたが、呆気にとられたのか面白がったのか誰も止める者はいなかった。このときの女はメガネをかけていなかった

その次の日、書留の手紙が女房と俺宛に届いた。内容は二通とも同じものだった。どちらも手書きで、ついこの前俺の家に届いた手紙と同じ筆跡だった。ただし中味はまるで違っていた。俺がここだけの話だ、と断って喋ったことが全部書いてあった。ただひとつ俺の言ったことと違っていたのは、イボンヌ・エリマンが男だったことだ。女は俺の嘘を見抜いて内容を訂正してくれていた。誰がいつ撮ったのか、俺が言い逃れできないような写真も数枚添えられていた。

昨日限りで学校を辞めた女は、その日から兄夫婦と一緒に家業のうどん屋を手伝い始めた。

女房はヒカルを連れて再び里に帰り、今度は二度と戻って来なかった。俺は年度途中の異例の配置換えで別の学校に移った。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459d/>

犬の話

2011年2月3日02時16分発行